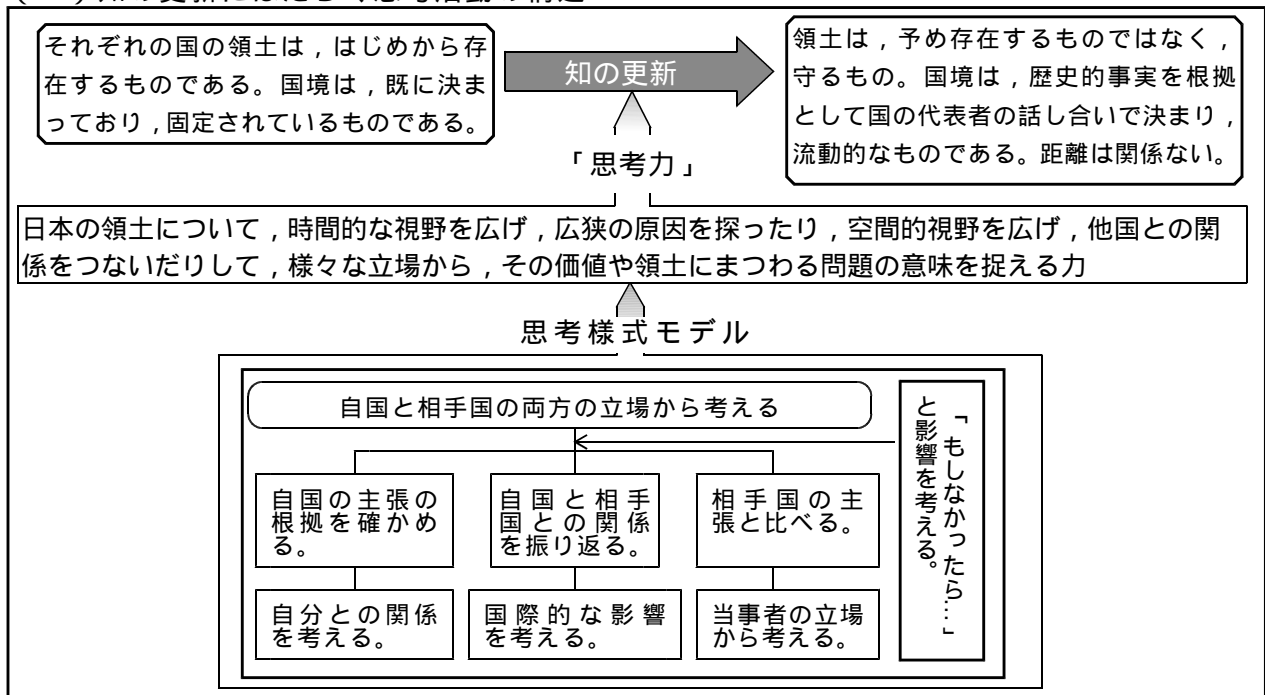


4 言語活動を充実し，思考様式を顕在化する学習指導の実際

「日本の領土」 - 北方領土問題を考える - (第5学年)

(1) 知の更新にはたらく思考活動の構造



上記「知の更新」は，自国の立場に固執しては，実現しない。そのため，本実践では「自国と相手国の両方の立場から考える」という思考様式の習得・活用により立場の転換を図るとともに，特に時間を広げ歴史的背景に触れながら，自国と相手国の関係を振り返る思考様式の顕在化をねらった（思考様式モデル参照）。そうすることで，歴史的経緯や領土に関する条約の存在に気付かせることができ，領土に関する認識を新たにできると考えた。

(2) 思考活動を促す開発教材

北方領土問題を平和的に解決する「サミットへの提言」を書くために，日口の主張を比較し，過去の条約で定められた領土を調べる学習

ロシアが北方領土を不法に占拠している事実は，子どもにとって衝撃的である。平和的な解決をめざすためには，冷静に相手の主張に耳を傾ける必要がある。そこで，日口両国の主張を観点別に並べて比較し，過去の条約を調べる学習を設定した。

「言語活動の充実」の視点から

本実践で言語活動の充実を図った場面は2か所ある。1つ目は，ロシアの主張に対して反論する場面である。ここでは，自国の主張を調べてきた体験が生かされる。調べが深ければ深い程，反論が活発となる。反論には情動が伴うため，更新前の知が表出されやすくなるだろう。また，座席表の活用によって，視点の転換・拡充を図り，反応の表出を促す。2つ目は，過去の条約で定められた領土を調べた後の話し合いである。条約に定められた領土を地図に書き入れる体験が思考の言語化を促すと考えられる。

「思考様式の顕在化」の視点から

島を追われた島民たちの状況から，「ロシアはひどい」と反論が活発になった際，「平和的に解決するために，ロシアも納得する根拠を探していたのでしたよね」という反応を取り上げ，集団吟味の核とする。何のために主張を比較しているのか，めあてを共有化させるのである。そのことにより，冷静に論点を整理させる。そして，ロシアも納得して交わした約束である「条約」（自国と相手国の関係）を振り返ることが解決の糸口になることに気付かせ，思考様式の顕在化を図る。

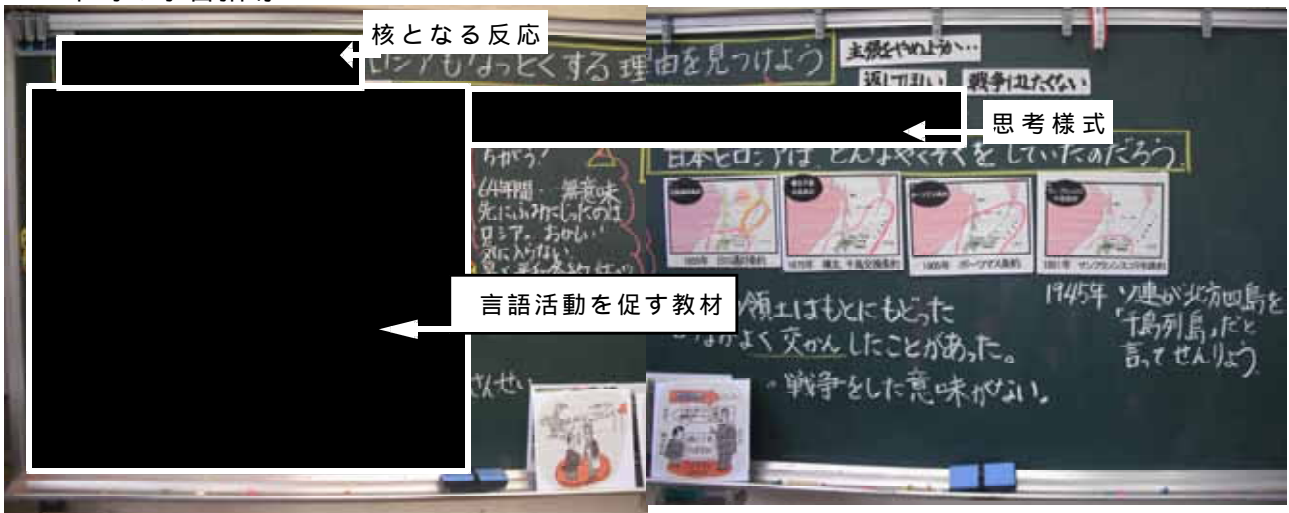
(3) 学習指導の実際

授業の概略

< 本時の学習指導 >

学 習 活 動	思考様式の顕在化につながる主な反応
<p>平和的に北方領土問題を解決するには、7月サミットで、日本は何を根拠として、返還を主張すればよいのだろう</p>	
<p>1 個々の提言の要約を記した座席表を読み、話し合う。 (1) ロシアの主張を基に、日本の主張すべき根拠を話し合う。</p>	<p>「追い出された島民」を理由として主張すればいい。 「もともと日本の領土」を理由として主張すればいい。 「約束が違う」ことを根拠として主張すればいい。 ロシアが先に追い出したからロシアが悪い。 日本が先に住んでいた。割り込んでくるロシアが悪い。 条約は世界が認めている約束。ロシアも一度は納得してる。</p>
<p>(2) ロシアの立場に立って聞き合い、中心に主張することを話し合う。</p>	<p>このままでは戦争になるかも。相手を責めているだけなので、平和的な解決につながらない。 約束のことだけロシアの反論がない。</p>
<p>思考様式を顕在化させる言語活動</p>	<p>平和的に解決するために、ロシアも納得する主張を探していたのですね。ロシアや島民の立場からも考えないといけない。 約束を守ることは、信用につながる。破ったままだと、世界の信用を失うことを伝えればよいのでは。主張すると効果がありそう。自分のことだけでなく、相手のことだけでなく、自分と相手の関係を考えると解決につながりそう。</p>

< 本時の学習指導 >



「思考様式を顕在化する言語活動」の詳細

対立軸を視覚化することにより、「領土の決め方」「島民のこと」「返還の方法」では、解決に至らないことを確認することで、残った軸である「条約」に着目させ、「これまでの両国の約束（関係）を振り返る」思考様式を顕在化する言語活動

板書を使って、日本の主張とロシアの主張を整理し、比べやすいよう視覚化した。このことによって、子どもたちから、いろいろな反応が出された。

「ロシアは一方的だ。日本は何も悪いことをしていないのに」「まだ決着がついていない問題なのに、自国の領土と思っているのはおかしい」「ロシアが武力で奪ったのに、『ふるさとを奪うな』という主張はおかしい」「ロシアは自分の国のことしか考えていない」等、主にロシアの主張に対する反論が次々と感情に任せて表出された。

そこで、「これらの主張を7月サミットで主張するんだね」と切り返した。子どもたちは、平和的な解決のための理由を見つけていたことを思い出し、核となる反応を表出した。

「平和的に解決するために、ロシアも納得する理由を見つけていましたよね。これを話し合っても相手が怒るだけで解決しません。」
【核となる反応】

この反応を受け、学習問題に下線を引き、強調した。さらに、なぜ解決しないのか、という問題についても考えさせた。すると、「相手の反対意見だけ言っても受け入れてくれないので理由を言うべき」「ロシアの主張も聞く」「相手（ロシア）の可能性を信じて」等と領土問題を解決する際に重要な思考様式が言語化されていった。しかし、まだ本時ねらっていた「自国と相手国の関係を振り返る」という思考様式には気付いていなかった。



そこで、何が対立しているのか、観点を再度整理した。子どもたちは「領土の決め方」「島民のこと」「領土の返し方」「解決法」の論点が平行線の議論となっていることに気付いていった。これらの論点については日ロそれぞれに言い分があり、そのことを主張しても解決につながらないと考えた。そこで、対立していない「約束が違う」という主張に目を向け始めた。

「約束が違うことを主張すればいい。」

【思考様式の顕在化】

「約束は一度はお互いに納得して結んでいるものだから。きちんと説明すれば伝わるのではないか」という意見が出された。また、生活場面とつないで、トラブルが起きた時にはどんなきまりや約束をしていたかを振り返っていることと同じだという意見も出された。さらに、国と国との間で交わされる約束を条約と言い、当事国以外の他国も認めているものであることを補説した。



「国と国の約束は国際的に認められているものだから、それを主張することは、効果がある。どんな条約を結んでいたかを調べたい」と考えたことを表出し、ねらいとしていた「自国と相手国の関係を振り返る」思考様式が顕在化されていった。さらに、その後の「サミットへの提言」には、この思考様式を活用して意見を述べている記述や「領土は動く」と更新後の知として想定していた認識の変容が見てとれる記述が見られた。

【サミットへの提言】

(4) 検証データを通して

本学級の子ども38名を対象に、本実践前後でテスト（9点満点）を用いて「思考力」の伸びを検証したところ、平均値で0.6点向上した。この差について、t検定を行ったところ、有意差が見られた〔 $t(38) = 2.24, P < .05$ 〕。また、実践直後と1か月後の状態を調べ、比較したところ、平均値が0.05点下がった。これについて、t検定を行ったところ、有意差はなかった〔 $t(38) = 0.81, P = N.S.$ 〕。1か月後も実践直後とほぼ同等の結果が得られたことから、「思考力」の定着が図られたのではないかと考えられる。

(5) 考察

上記のような成果が得られた要因として、次の点が挙げられる。

1つは、座席表の活用である。集団吟味の際、これまでの友だちの考えを座席表を基に振り返り自分の考えを整理している様相が見られた。1時間毎の子どもの考えを記録し、積み重ね、情報を公開しておくことが、視点の転換・拡充を促し、反応の表出につながったと考えられる。

2つ目は、「平和的な解決」というめあてを共有化したことが、集団吟味を促したことである。そのことによって思考様式が顕在化され「思考力」の定着につながったと考えられる。

しかし、2つ目に想定していた言語活動である「条約に定められた領土を地図に書き入れる体験が思考の言語化を促す」ことについては、多様な反応が実現されなかった。要因として、歴史的な背景がイメージできなかつたこともあるが、「条約」等、用語の難解さも挙げられる。考えたことを表現させるために、ことばを補う支援の在り方が課題として残された。